

絵本の挿絵の役割に関する研究

—— しかけ絵本の操作をめぐる ——

佐藤 公代

(教育心理学研究室)

(平成9年4月30日受理)

Apperception of kindergarten children from stories in picture and pop-up books

Kimiyo SATO

問題と目的

絵本の挿絵の役割については、佐藤公代(1993)の研究、しかけ絵本の説明についても、佐藤(1995)の研究を参照するとして、今回は、佐藤(1995)の「自分が動かす場合と、人によって動かされる場合とで、子供側の関心の持ち方が異なると思われ、今後の課題となるであろう」に焦点をあてて研究する。

舟橋斉(1990)の絵本の選び方の4つの視点、すなわち、①子どもの身の回りのことが書かれているか(具体的体験)、②繰り返しの手法で書かれているか(繰り返し)、③文章、絵ともに単純化(単純性)されているか、④ユーモアはあるか(ユーモア)、にもとづいて、「つよいのはだーれ」という絵本を用いる。これは、ほら穴に怪獣がいると思い込んだ様々な動物たちが自分の強さを自慢しながら怪獣退治に向かうが、いざ、ほら穴の前に立つと、みんなはおっかなびっくりで逃げ出してしまう。しかし、ほら穴の中から出て来たのは小さなネズミだった、というお話である。これには、折り込んである部分を開くとページが広がる片観音といわれるしかけが用いられており、ページをめくると動物たちがいろいろなしぐさで自分の強さを自慢するというしくみになっている。ここでは、登場する動物がお話の内容にそった動きをするように、また、幼児が直接触れて操作できるようなしかけを多く含むようにするため、菊池真美氏が手を加えて、画面の一部が飛び出したり、画面の一部を動かす形のしかけを新たに付け加える。そして、しかけの有無が幼児の物語理解に影響を与えるかどうかを比較検討するため、しかけをなくした平面的な絵本も作成する。

仮説は次の通りである。

- ① 内容理解テストにおいて、しかけのない絵本を見せる方が、しかけのある挿絵を見せるよ

りも理解度が高くなり、さらに、年齢の高まりとともに理解度が高くなるだろう。

② 内容理解テストにおいて、しかけのある挿絵を幼児自身が操作した方が、しかけのある挿絵を実験者が操作するよりも理解度が高くなるだろう。

③ 挿絵の理解において、しかけのある挿絵を幼児自身が操作することにより理解が高まるだろう。

④ 文章の理解において、しかけのない絵本が理解を高めるだろう。

方 法

1) 期日：1996年11月24日

2) 被験者：松山市立M幼稚園，4歳児－77名，5歳児－79名，総計156名。

3) 実験材料：「つよいのだーれ」（木村裕一作，奥田玲子絵，階成社，1984）というしかけ絵本を菊池真美氏が，幼児が直に触れて操作できるような立体的なしかけを多く含むように作り直した絵本と，しかけをなくして平面的な挿絵に作り直した絵本を使用する。文章は，しかけの有無にかかわらず同じものである。

4) 条件：各年齢において，Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ群とも半数ずつに無作為に分ける。

Ⅰ群：しかけのある「つよいのだーれ」を幼児自身が操作し，読み聞かせる群

Ⅱ群：しかけのある「つよいのだーれ」を実験者が操作し，集団読み聞かせる群

Ⅲ群：しかけのない「つよいのだーれ」を実験者が，集団読み聞かせる群

5) 手続き

4，5歳児を無作為に3群にし，Ⅱ群にはしかけのある「つよいのだーれ」を，Ⅲ群にはしかけのない「つよいのだーれ」を用いて，「これから，つよいのだーれという絵本を読みます。後でみんなに聞くことがあるので，よく聞いていてね。」と教示し，集団で絵本を読み聞かせる。このとき，絵本の中のしかけは，実験者が操作する。Ⅰ群はしかけのある「つよいのだーれ」を用いて，「これからつよいのだーれという絵本を一緒に読みましょう。この絵本にはしかけがたくさんあるので気づいたらどんどん絵本に触ってもかまいません。後で聞くことがあるのでよく見ていてね。」と教示し，絵本を一緒に読んでいく（字が読める場合は幼児自身に読ませる）。この場合，絵本の中のしかけは幼児自身が自発的に操作するようにする。しかけに気づかない場合は，しかけが隠れていることをヒントとして与える。その後，個別実験として質問し，感想を聞く。質問は，最初，再生，次に二者択一の再認とする。

質問内容は次の通りである。

- ① どんな動物がお話に出てきたかな
- ② ビッ君はどんなウサギかな
- ③ 気味の悪い音はどこから聞こえてきたかな
- ④ みんなは洞窟に何が住んでいると思ったかな
- ⑤ ダチョウはどうやって怪獣をやっつけると言ったかな
- ⑥ ヘビはどうやって怪獣をやっつけるといったかな
- ⑦ ワニはどうやって怪獣をやっつけるといったかな
- ⑧ ゾウはどうやって怪獣をやっつけるといったかな
- ⑨ 怪獣をやっつけに行き，洞窟から声が聞こえた時みんなはどうしたかな

- ⑩ ビッ君はどうして洞窟の前から逃げ出さなかったのかな
- ⑪ 洞窟の中からでてきたのは何だったかな
- ⑫ 洞窟の前から逃げ出さなかったビッ君を見て他の動物たちはどう思ったかな
- ⑬ ゴウの吹きかけた水で飛ばされたのは何だったかな

結果と考察

Fig. 1 に 4, 5 歳児における各群の理解度テストの平均を示す。

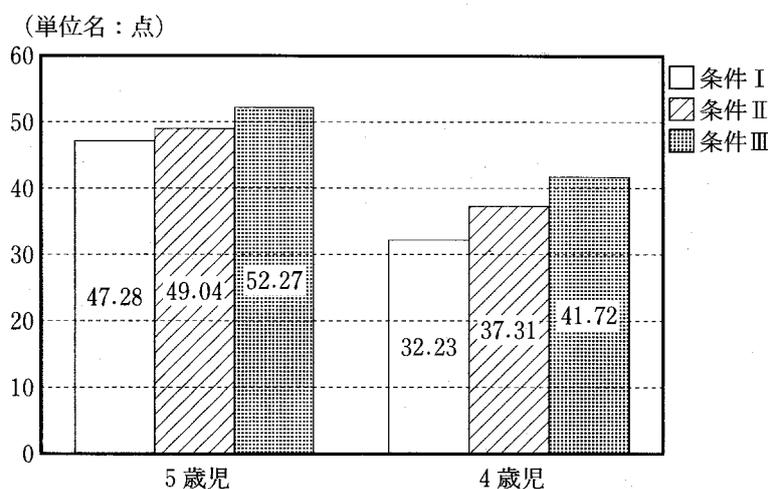


Fig. 1 各年齢における内容理解テストの平均得点

Fig. 1 から、4, 5 歳児とも I < II < III 群の順に理解度が高まっており、4 歳児において条件間に 5% 水準で有意差が認められる ($F(2, 74) = 3$)。さらに、チューキー法によると、条件 I - III 群間に 5% 水準で有意差がみられる。また、4 歳児より 5 歳児の方の理解度が高まり、条件 I, III 群において、条件間に 0.1% 水準で、条件 II 群において、年齢間に 0.1% 水準で有意差がみられる (条件 I: $t = 4.35, df = 49$, 条件 II: $t = 2.92, df = 38.43$), 条件 III: $t = 3.57, df = 49$)。

以上より、しかけのある挿絵をみるよりも、しかけのない挿絵をみる方が内容理解が容易である。これは、しかけが幼児の関心をひきつけてしまい、語りの声が聞き流され、部分的にしか話を把握することができないためであろう。一方、しかけがないと挿絵と読み聞かせの声の両方に注意を払うことができ、絵と文が一体となって読み取られるので、話全体の流れがつかみやすいためであろう。さらに、しかけのある挿絵を幼児自身が操作するよりも、実験者が操作する方が内容の理解を高めている。これは、実験者がしかけを操作する場合、しかけへの興味がお話し全体への集中につながっていったが、自ら操作する場合は、しかけの操作のみに興味向けられ、語りに向けられる注意力が散漫になり、お話し全体には集中できなかったためである。しかけの操作が幼児の注意を引き付けてしまい、挿絵から読み取られる内容は分かっていても、文章からの内容の理解が浅くなり、部分的にしか話を把握することができなくなったのであろう。

よって、仮説①は支持されるが、仮説②は支持されない。

Fig. 2 に各年齢における挿絵でのみ提示された内容に関する質問の平均得点を示す。

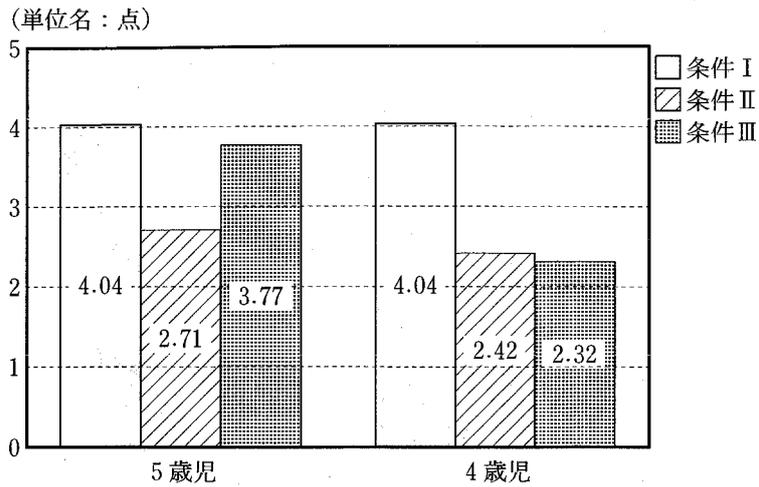


Fig. 2 各年齢における挿絵のみ質問の平均得点

Fig. 2 から、4 歳児において、Ⅲ<Ⅱ<Ⅰの順に、挿絵の内容の理解度は高まり、条件間に 1%水準で有意差がみられる ($F(2, 74) = 6.32$) チューキー法によると、Ⅰ-Ⅱ条件間、Ⅰ-Ⅲ条件間に 5%水準で有意差がみられる。5 歳児においては、Ⅱ<Ⅲ<Ⅰの順に、挿絵の理解度が高まり、条件間に 5%水準で有意差がみられる ($F(2, 76) = 3.70$)。さらに、チューキー法によると、Ⅰ-Ⅱ条件間に 5%水準で有意差がみられる。

以上より、4 歳児において、しかけのある挿絵を幼児自身が操作することで、挿絵の理解度を高めている。これは、挿絵の中のしかけを幼児自身が操作することで、自らの活動がしかけの動きにどうつながるのかと、興味をもって挿絵を眺めるので、それが挿絵の細部にまで、注意、関心をはらって見ることにつながり、挿絵の内容がよく理解できるのであろう。5 歳児においては、興味のないしかけであったのかもしれない。

よって、仮説③は 4 歳児においてのみ支持される。

Fig. 3 に各年齢における文章優位質問の平均得点を示す。

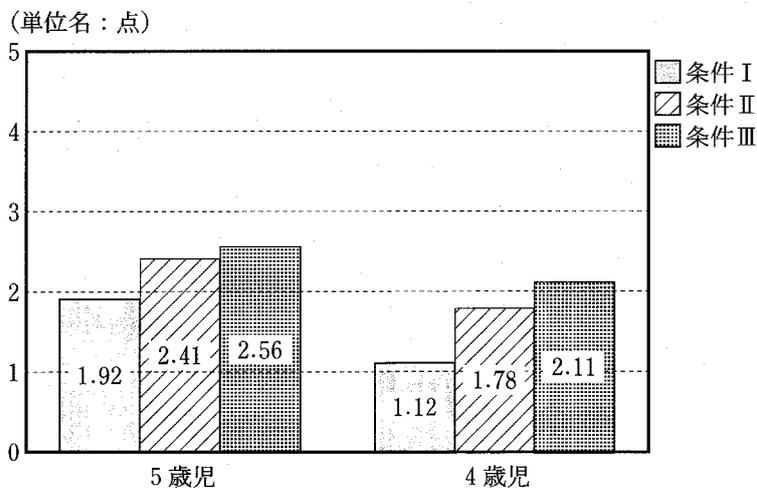


Fig. 3 各年齢における文章優位質問の平均得点

Fig. 3 から、4, 5 歳児とも、Ⅰ<Ⅱ<Ⅲの順に理解度が高まり、4 歳児において、条件間に 0.1%水準で、5 歳児において、条件間に 5%水準で有意差がみられる (4 歳児： $F(2,$

74) = 7.80, 5歳児: $F(2, 76) = 3.24$ 。さらに、チューキー法によると、4歳児では、I-II条件間、I-III条件間に、5歳児ではI-III条件間に5%水準で有意差がみられる。これは、しかけがあると、挿絵に注意が集中してしまい、語りに向けられる注意力が散漫になり、文章で提示されている内容の読み取りが不十分になるためであろう。

よって、仮説④は支持される。

Fig. 4 に各年齢における条件別感想の種類、Fig. 5 に各年齢における条件別感想件数を示す。

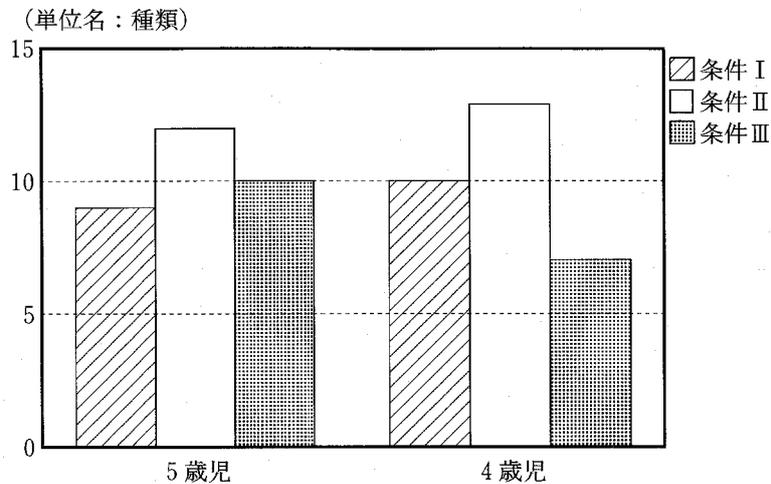


Fig. 4 年齢、条件別感想の種類

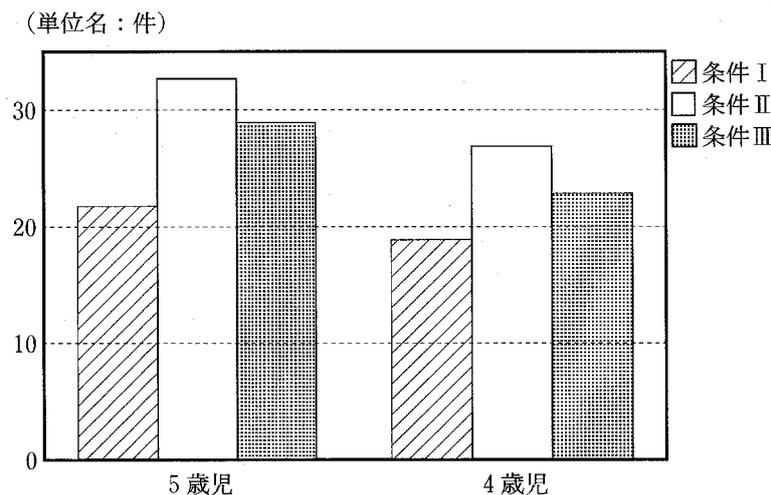


Fig. 5 年齢、条件別感想件数

Fig. 4 から、4歳児において、 $III < I < II$ 、5歳児において、 $I < III < II$ の順に種類が多くなっている。

Fig. 5 から、4、5歳児において、 $I < III < II$ の順に件数が多くなっている。

Fig. 6 に4歳児における条件別感想分類を示す。

Fig. 6 から、一番多かった感想は、条件 I、IIにおいて、「ゾウが鼻から水を出すところがおもしろかった」、条件 IIIにおいて、「ヘビがぐるぐる巻きにするところがおもしろかった」、である。ヘビ、ワニ、ゾウに関する感想は、3条件とも共通して多かった。3条件の感想を比

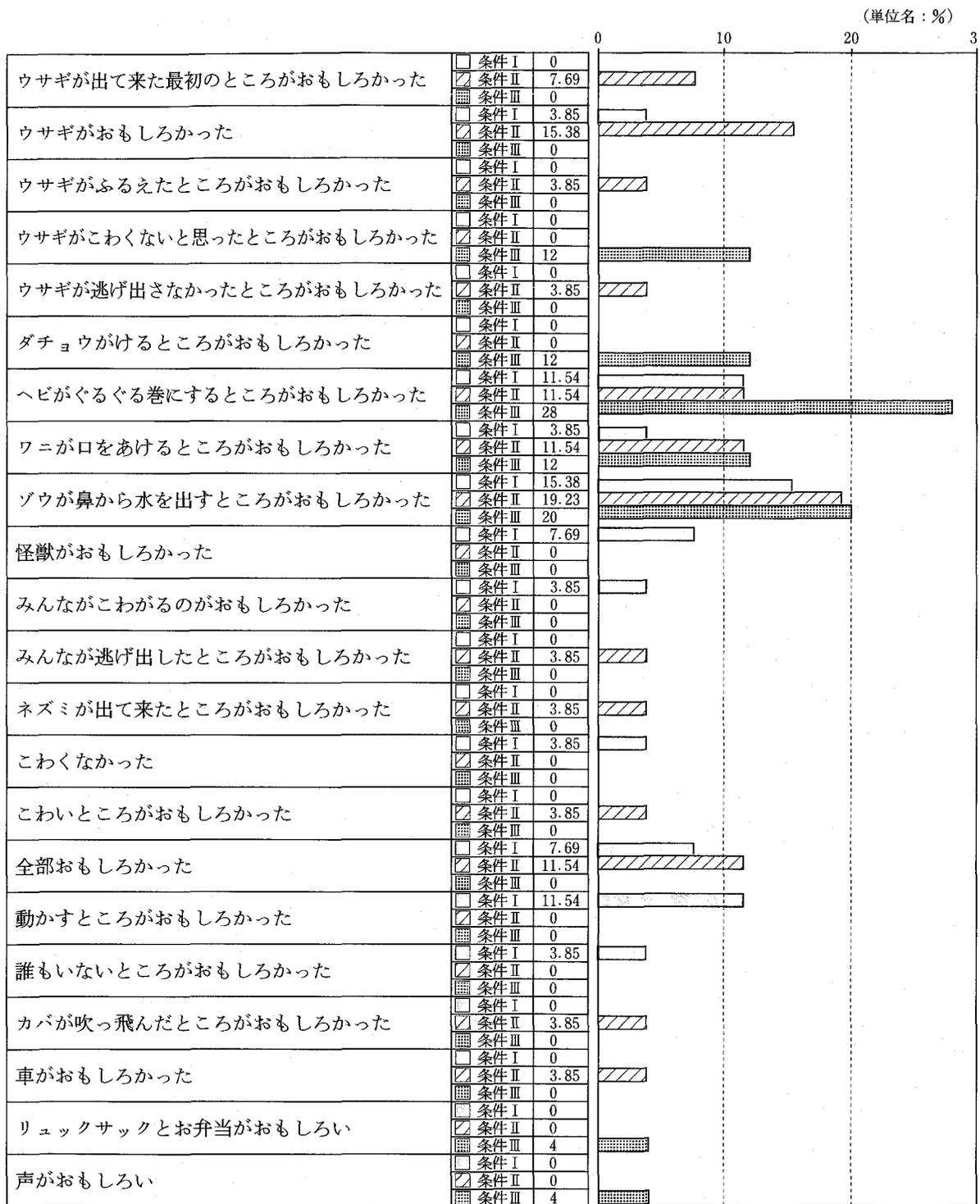


Fig. 6 4歳児における条件別感想分類

較してみると、条件Ⅲはダチョウ、へび、ワニ、ゾウの怪獣退治の方法におもしろさを感じている感想が大部分を占めている。条件Ⅱにおいては、主人公的なウサギの行動や気持ちに関する感想が、他の条件より多くなっている。条件Ⅰにおいてのみ「しかけを動かすのがおもしろかった」というしかけに直接関係する感想がみられる。

以上から、4歳児においては、しかけのある挿絵を実験者が操作すると、絵本の文章、言葉と挿絵、しかけの動きが一体となって読み取られ、自分が絵本の中の中心人物であるウサギに

絵本の挿絵の役割に関する研究

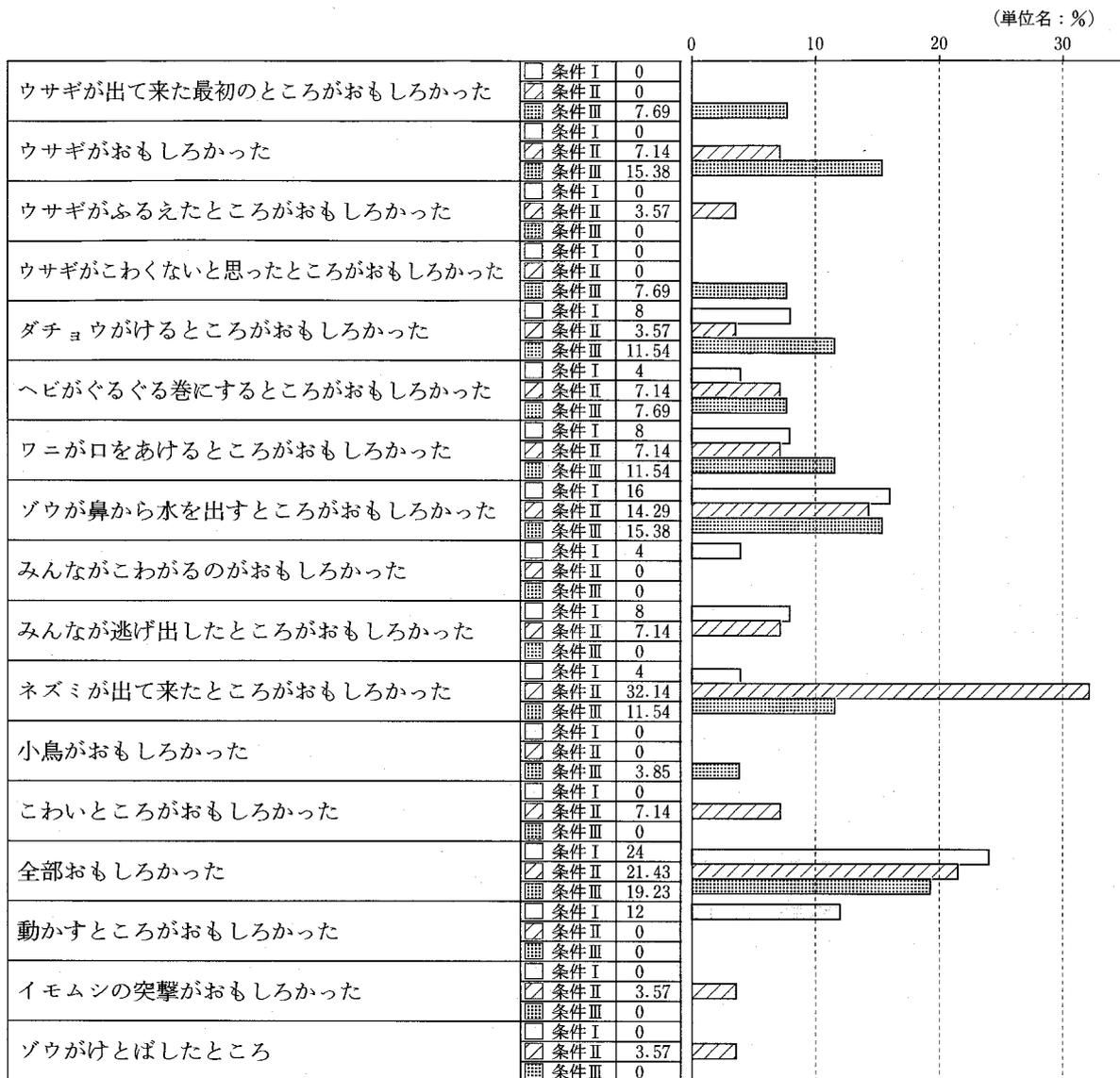


Fig. 7 5歳児における条件別感想分類

なったつもりで、自分なりの想像や考えをどんどん広げていくのであろう。つまり、4歳児では、しかけのある絵本を読んでいく場合、中心人物の視点のみで話を眺め、内容を考えていく傾向が強いのであろう。挿絵の中のしかけを動かすことに対する興味が伺える。

Fig. 7に5歳児における条件別感想分類を示す。

Fig. 7から、感想の多い順から、いくつかあげてみる。条件Ⅰでは、「全部おもしろかった」に次いで、「ゾウが鼻から水を出すところがおもしろかった」である。条件Ⅱでは、「ネズミがでてきたところがおもしろかった」という感想が一番多い。これは、挿絵の中のしかけを動かすと、茂みの中に隠れていたネズミが現れるという意外性に、より強く印象づけられたのであろう。次いで、「全部おもしろかった」、「ゾウが鼻から水を出すところがおもしろかった」という順である。条件Ⅲでは、「全部おもしろかった」という感想が一番多い。次いで、「ウサギがおもしろかった」、「ゾウが鼻から水を出すところがおもしろかった」が同数で、次に、「ダチョウがけるところがおもしろかった」、「ワニが口をあけるとところがおもしろかった」、「ネズミがでてきたところがおもしろかった」が同数である。また、「全部おもしろかった」、「ゾウ

が鼻から水を出すところがおもしろかった」という感想は、条件Ⅰ、Ⅱ、Ⅲに共通して多くみられる。さらに、3条件ともダチョウ、ヘビ、ワニ、ゾウの怪獣退治の方法におもしろさを感じている感想が、共通してみられる。条件Ⅰ、Ⅱにのみ「みんなが逃げ出した所がおもしろかった」という感想がみられる。この部分は、しかけを動かすと、ダチョウ、ヘビ、ワニ、ゾウの4匹が、一緒にくるくると円を描いて動くようになっており、かなり動的なしかけである。予想外に大きく動くしかけのある場面は、強く印象づけられるのであろう。また、条件Ⅱにおいて、しかけのある挿絵を使用しているにもかかわらず、話の内容、展開を通しての感想しかないが、条件Ⅰにおいて、「しかけを動かすのがおもしろかった」という感想がみられる。これは、自分でしかけを操作することを楽しみを感じており、しかけを動かすことは、楽しさにつながると考えられる。また、「ウサギがおもしろかった」という話全体から得られるウサギの行動、言動の矛盾に対するおかしさをあらわす感想は、条件Ⅱでもわずかにみられるものの、条件Ⅲにおいては、圧倒的に多い。これはしかけのない挿絵を用いることで、しかけのあるものではしかけへも向けられていた注意が、文章と挿絵のみに向けられ、話の流れを全体としてつかむことができるため、話を通して全体的に統合された感想を述べるのであろう。

以上から、しかけのある挿絵を実験者が操作すると、絵本の文章、言葉と挿絵、しかけの動きが一体となって読み取られ、自分なりの想像や考えをめぐらせやすい効果があったのであろう。よって、感想の種類や件数が他の条件より多くなったのであろう。しかし、幼児がしかけを操作することは、「しかけを動かすこと」にのみ興味が集中してしまい、話の内容や展開に考えをめぐらせるには至らなかったのであろう。よって、感想の種類や件数が他の条件より少なくなったのであろう。

読み聞かせ中の態度について、4、5歳児とも、全体を通して、条件Ⅰ、Ⅱの方が反応がよく、発声も多い。条件Ⅲにおいては、比較的静かに聞いていたといえる。すなわち、しかけのある挿絵の方が、絵本に自分を参加させることができ、子どもにとって、より興味関心を深めている。条件Ⅰではしかけを動かすことに熱中して、語りには注意が向けられていない様子であるが、条件Ⅱ、Ⅲにおいては語りにも十分注意が払われている。つまり、しかけのある挿絵を幼児自身が操作することは、語りに向けられる注意力を散漫にしている。

Fig. 8 に各年齢、各条件別における子どもの好きなページの種類の示す。

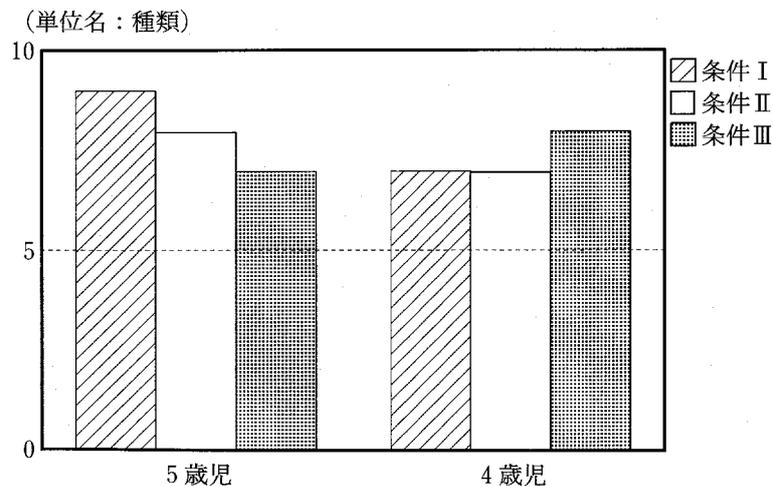


Fig. 8 年齢、条件別好きなページの種類

Fig. 8 から、4 歳児においては、 $I = II < III$ の順に、自分の日常の好みは絵本の内容にうわのせされ、絵本の内容を読み取る時もその好みは影響を与えている。5 歳児では、 $III < II < I$ の順に、しかけがない挿絵よりもしかけのある挿絵が、そして、しかけを実験者が操作するよりも幼児自身が操作する方が、幼児の興味を挿絵としかけの両面に多様化され、個人の好みはより顕著に表れてくる。

結 論

- ① 4, 5 歳児とも、しかけのある挿絵よりも、しかけのない挿絵の方が、総合的理解を高めている。これは、しかけが、幼児の注意をひきつけてしまい、読み聞かせの声に注意が払われなくなった結果、挿絵から読み取れる内容はわかっていても、文章の内容が軽視され、絵と文が分離して読み取られ、部分的にしか話を把握することができなくなってしまったからであろう。しかけのない挿絵の場合、挿絵と読み聞かせの声の両方に注意を払うことができ、絵と文が一体となって読み取られ、話全体の流れがつかみやすいのであろう。
- ② 4, 5 歳児とも、しかけのある挿絵の場合、しかけを第三者が操作する方が、幼児自身が操作するよりも、総合的な理解を高めている。これは、幼児がしかけを操作することに夢中になり、幼児の興味関心は、しかけを動かすことにのみ向けられ、語りで提示される内容は聞き流されて、話の全体像を築くことができないからであろう。一方、第三者がしかけを操作することにより、幼児の興味は、動くしかけを含む挿絵全体に向けられ、幼児がしかけを操作するよりも理解を高めているからであろう。
- ③ 4, 5 歳児とも、挿絵のみで提示されている内容の理解に関して、しかけのある挿絵を幼児自身が自らのペースで操作することにより理解を高めている効果がある。これは、しかけを自身で操作することにより、挿絵の内容が細かい部分までも強く印象づけられたことを示している。さらに、自分のペースでページをめくることができるので、機械的にページがめくられていく集団読み聞かせに比べて、絵から広がる様々なイメージや自由な感じ方、発想がち切られることなく展開していくからであろう。また、しかけの有無に限定して比較した場合、4 歳児では、しかけのある方が、5 歳児ではしかけのない方が理解を高めている。
- ④ 文章のみで提示された内容の理解においては、5 歳児はしかけの有無、操作の主体は影響を与えないが、4 歳児では挿絵にしかけのある方が理解度を高め、第三者がしかけを操作した方がさらに理解を高めている。5 歳児では、しかけや、その操作に興味をもつこと以上に文章のみの読解力が高くなっている。4 歳児では、しかけへの興味がお話全体に対する集中につながっていったが、自分で操作する場合は、しかけを動かすことのみに興味に向けられ、お話全体には集中できなかった。
- ⑤ 挿絵と文章の両方で同程度提示されている内容の理解に関して、5 歳児では、しかけの有無、および、操作の主体は影響を与えず、しかけや、その操作に興味をもつこと以上に挿絵及び文章の両方を読み取る能力が高まっているためである。4 歳児では、しかけのない挿絵の方が理解を高める効果がある。
- ⑥ 挿絵より文章でより多く提示されている内容の理解に関しては、4, 5 歳児ともしかけのない挿絵が理解を高めている。これはしかけがあると、挿絵に注意が集中してしまい、より多くの内容が提示されている文章の読み取りが不十分になるためであろう。4 歳児においてのみ、

しかけがある場合は、幼児自身が操作するよりも、第三者がしかけを操作する方が理解を高める効果がある。

⑦ しかけのある挿絵を幼児自身に操作させることで、挿絵の内容の読み取りは深まる。しかし、文章の内容の読み取りでは、しかけのない挿絵の方がその読み取りを深めている。

⑧ しかけのある挿絵を第三者が操作することは、他の条件に比べて、挿絵と文章が一体となって読み取られ、自分なりの想像やイメージをふくらませる効果がある。しかけのある挿絵には、絵本に自分を参加させ、より興味関心を深めていく効果がある。しかけのある挿絵を幼児自身が操作することは、しかけに対する興味を高めるが、文章に向けられる集中力を散漫にする影響がある。

⑨ すべての条件において、理解度の年齢的発達がみられる。

以上をまとめると、しかけのある挿絵や、しかけを幼児自身が操作することは、内容の理解を高めるとは一概にはいえない。しかけには幼児の興味をひきつける効果があるが、それと同時に、文章に対する集中を散漫にする影響もみられる。しかけを幼児が操作することは、絵本に対する興味、とくに、しかけを含む操作に対する興味を高めるが、文章に対する集中を散漫にし、文章の読み取りが浅いものになる。内容理解という点では、しかけを幼児に操作させることは、マイナスの効果になる。しかし、楽しんで絵本にふれるという点からすれば、しかけ絵本は、子どもたちの興味を高め、想像やイメージの広がりをもつ。つまり、しかけ絵本を自由に操作することは、絵本の世界に自分参加させ、夢中になって、イメージ体験、感情体験を味わうことにつながる。このような体験を味わうことを重ねていくうちに、ことばとイメージが結び付けられるようになり、さらなる広がりを生み出してくる。

今後の課題

- ① しかけを含む挿絵、文章への関わりを等しい条件にして比較する。
- ② 場面によって、しかけを含む場所と含まない場所を作ったり、内容によって、しかけを用いるか用いないかを変えたりする。
- ③ しかけの操作としかけを含む挿絵と文との相互作用を検討する。

引用文献

- 船橋斉 1990 絵本，エホン，ご本，ゴホン，法政出版
木村裕一作，奥田玲子絵，1984 つよいのだーれ 偕成社
佐藤公代 1993 絵本の挿絵の役割に関する研究—発達・教育心理学の立場から考える—近代文藝社
佐藤公代 1995 絵本の挿絵の役割に関する研究—しかけ絵本を通して—読書科学 Vol. 39. No.2 58-64

付 記

実験者の菊池真美氏，三津浜幼稚園の園長先生，諸先生，園児達に，いろいろお世話になりました。心より深く感謝致します。